Journal of History for the Public (2011) **8**, pp 14-33 ©2011 Department of Occidental History, Osaka University. ISSN 1348-852x
Who Wears Jeans?: Acceptance of Jeans in the Showa Era of Japan Viewed from Generations and Genders
Yuko KOYAMA

特集　世代と歴史学のいま 2

「ジーパン」は誰のものか

世代とジェンダーからみる日本のジーンズ受容試論

小山有子

1　はじめに

1977 年、大阪大学において、教師がジーンズを着用していた女子学生を教室から追い出すという事件があった。学生と教師とはその後、学内において議論したが、双方の主張はすれ違うばかりで解決には至らなかった。しかし、この事件が新聞などで「ジーパン論争」として報じられると、たちまち多数の意見が各紙に寄せられ、投書ブームと言われるほどとなったのである。そこでの意見の大半は、学生側に非があるということ、「ジーンズは女子学生にふさわしくない」という教師の意見、及び学生にたいして自身の主張を断固として曲げなかった教師の態度への賞賛の声であった。このときの投書の「ジーンズは若者のもの」「ジーンズは TPO に合わせて着用するべきだ」という意見は、多くの投稿者に共有されていた。一方学生援護派は、当時男性に比べて女性のジーンズ（ズボン）着用にはまだまだ多くの障壁があったため少数だったが、教師の意見は男女差別であることを強く主張するものであった。

しかし、ジーパン論争よりも前に来日したリーバイ・ストラウス社の会長ウォルター・ハースは高らかにこう宣言している。「ジーンズは、今では男も女も、老いも若きも、富める者も貧しき者も、過激な学生もアメリカ大統領も着ている。つまり、階級とか性別とかいった差別をまったく超越したものなんです[(1)]」。

ある衣服がその社会に受け入れられるには、さまざまな葛藤があることは、現在においてもよくみられる光景である。“ 衣服 ” という単体ではなく、人が着用し、“ 服装 ” となるとき、それはすでに着用者までも含めたイメージとなり、ひとつの衣服以上の意味を非言語記号として発信し始める。ジーパン論争の場合、教師は「若い女性にはジーンズはふさわしくない」と断じたが、逆に言えば若い女性以外にはジーンズはふさわしい衣服であるということにもなる。リーバイス社の会長は「ジーンズは誰にでもふさわしい」ものであり差別がない服だと誇ったが、残念ながら日本では、ジーンズ受容に性別と年齢による壁のあることが明らかとなってしまった。

(1)「ジーンズは性、階級、年齢を越えた衣服（ファッション）だ」『週刊朝日』1977 年 2 月 18 日号、118 頁。

本稿は日本でのジーンズの受容を、世代とジェンダーに注目しながら追うものである。ジーンズは誰が着用し、それによってどのようなイメージが付与されたのか。ジーンズイメージは変化をした／しなかったのだろうか。もし、変化があったのならば、それはなぜか。本稿はそれらを探るため、新聞を中心にジーンズイメージの変遷を追う。ジーンズイメージの検証のために新聞を調査の中心としたのは、本稿が単なる流行とその受容を論じるのではなく、ジーンズの社会的意味を検証するため、いわば世相としてのジーンズの姿を追跡する試みであるからだ。結果として、最先端の流行の紹介を目的とするファッション雑誌では現れることのない、ジーンズへの拒絶反応をも扱うこととなった。ただし、本稿で扱う時期が敗戦後から 70 年代までと長く、全てを網羅して見ることができたとは到底言えない。そのため、本稿は受容の試論として、先行研究を基礎とし、ジーンズが人びとの生活に接近した時期を中心に取り上げ、論じることとする。

現在のわたしたちの生活に深く根付いている青い木綿のズボン。ジーンズは日本社会において、どのように受け止められ、誰による着用がふさわしいとみなされてきたのだろうか。

2 「ジーパン」登場——アメリカが魅せたもの

日本におけるジーンズの先行研究としては、北本正孟、堀洋一、三井徹、出石尚三らをあげることができる。(2) しかし、これらが扱うのは、基本的にはアメリカでのジーンズの歴史と現代的な事情が主である。つまり、1848 年、ゴールドラッシュ時のアメリカで、鉱山で働く人びとのための労働着としてジーンズがスタートしたこと、また、ジーンズの生みの親とも言えるリーバイス社の経営の発展。そしてジーンズが今日、世界的に「アメリカ文化」を表すようになってきているという「定形」である。(3) 当然のことながら、日本でのジーンズ受容がアメリカと全く同様であるとは考えられない。

一方、日本でのジーンズに言及しているものでは、日本繊維新聞社、杉山慎策が詳しいが、そこで展開されているのは国産ジーンズメーカーについての産業史・経営史の様相が濃い。(4) 生産数や販売数などには詳しいが、着用する側への言及は非常に少ない。これらが強調しているのは、日本におけるジーンズ文化と呼ぶべきものが、アメリカから輸入してきたというだけではなく、この日本で（もしくは岡山という、特定の地域で）実験的に生産され、実績を積み、大きな産業となり、さらには世界にも注目されるようになってきたという繊維・アパレル産業

(2) 北本正孟『JEANS の本——世界を占領した“青の制服”』サンケイ新聞社出版局、1974 年、堀洋一『JEANS 終わりのない流行——ジーンズのすべて』婦人画報社、1974 年、三井徹『ジーンズ物語——「アメリカ発世界文化」の生成』講談社現代新書、1990 年、出石尚三『ブルー・ジーンズの文化史』NTT 出版、2009 年。

(3) このような偏りは、ジーンズに限ったものではない。日本での服装（ファッション）研究もまた、フランス・パリでのオートクチュールの歴史、あるいはイギリス・ロンドンでの歴史などに重点が置かれているのが現状である。日本における洋装の受容過程に関する研究は、パリやロンドンのそれに比べて非常に少数だ。そしてそれを「偏っている」とする視点も少なかった。

(4)『ヒストリー　日本のジーンズ』日本繊維新聞社、2006 年、杉山慎策『日本ジーンズ物語』吉備人出版、2009 年。

の歴史である。どちらにおいても、日本におけるジーンズイメージやその着用者との関わりについての記載は限られてしまうが、これらの資料をもとにして、まずはジーンズが日本で普及し始めた 1940-50 年代のジーンズ事情を概観したい。

ジーンズが初めて日本に上陸したのは関東大震災時の救援物資と出石は記しているがその詳細は不明である[5]。本格的に着用され始めたのは第 2 次大戦後と考えてよいだろう。アメリカから送られた物資として登場したジーンズであったが、着用目的ではなく包装材としての役割であったと『週刊朝日』の記事は伝える。そしてそれは日本人への物資ではなく、アメリカにいる家族が兵士に送る物資のなかでの包装材であったという。「お菓子などを送るのに穴があいたり、古くなって用ずみの G パンで外を包んであった」のを、日本ではもう一度本来の目的に使用した。なぜなら、「こちらはどん底の衣料不足、使い古しでもなんでも、ひっぱりダコの時代だった」からである[6]。戦中から木綿製品が大幅に不足していた日本では、厚手の木綿地ズボンは貴重なものであったことは想像に難くない[7]。それらは「PX［アメリカ軍内物品販売所］流れの G パンがアメ横に“商品”として並べられるようにな」ったり、「業者が米兵相手の女性を集めて“仕入れ”に協力してもらったり、米兵が直接売りにきたのを買ったりしていた」ものであった。だが、「とても需要にこたえきれず、間もなく品切れになってしまった」ほどの人気[8]。マルセル堂（1948 年創業）の檜山チヨノは、1970 年の回想でこう語る。

> あのころ［1950 年頃］（略）ヤミ物資のころの G パンは、高かったですよ。仕入れ値に 300 円から 500 円かけて売ったが、3200 円ぐらいで売れた。品薄だったので、仕入れた G パンを店へ出し、値段の紙をつけ終わらぬうちに売れてしまう、という状態でね[9]

1957 年に輸入が自由化され、以後は木綿地の入手が容易となる[10]。戦後の物資払底において、「ヤミ物資」としてのジーンズの人気は、果たして丈夫な木綿地ということだけであろうか。堀はこの G.I たちの「カッコよさ」「新しいカンジ」を、作業着としてのジーンズではなく、「ファッション」であったと指摘する。“純綿”で耐久性に優れているという理由だけではなく、見た目のスマートさ、それまでにない「カッコよさ」こそがジーンズの人気の要因と見ている

---

(5) 出石、前掲書、236 頁。

(6)「G パン　この粋なファッション」『週刊朝日』1970 年 2 月 27 日号、37 頁。

(7) 1938 年より木綿に規制がかかっていた。戦中においてはステープル・ファイバーの交ぜ織りが義務付けられ、人びとはそのか弱い繊維との混紡に悩まされた。

(8) 前掲『ヒストリー　日本のジーンズ』中の年表（57 頁）では、同様の事柄を 46 年に配置し、闇市でのジーンズ人気に触れているが（「闇市で米軍の放出品として中古ジーンズが見られ人気を呼んだ（東京・上野アメ横・神戸）」）、しかしその後に「進駐軍や米兵個人が G パンをマーケットに出した事実はないとされている」と説明をつけている。後者については不明。

(9)『週刊朝日』1970 年 2 月 27 日号、38 頁。

(10) 例えば『読売新聞』では「ひところ、貴重品の代名詞ともなつた“純綿”も、こう出回ると希少価値は消え失せはした」と報じている。「木綿を着よう」『読売新聞』1952 年 4 月 1 日。

のである。[11] そして G.I との結びつきのなかで北本は、ジーンズの日本独自の名称「ジーパン」は、「G.I パンツのなまり」であるとし、[12] 千村典生もこの「国産の」名称が「GI パンツ、略して G パンと呼んだ」からだと指摘した。[13] 出石は「ジーパン」という呼称がジーンズ販売の「マルセル」の檜山健一の命名だと指摘した。[14] 新聞でも、同一記事で混用した形跡はないが、ジーンズの表記は記事によってさまざまである。結局のところ、何がジーンズをして「ジーパン」たらしめたのかは不詳のままである。「ジーパン」の「ジー」が（J ではなく）G である理由や、「パン」が何を指すのかを特定するのは難しい。しかし、G.I たちとジーンズとの親和性に疑問の余地はなく、G.I たちのポジティブなイメージ――「カッコよさ」――に日本人も憧れの気持ちを抱いていたことは間違いない。

敗戦後から朝鮮戦争ごろまでのジーンズを受容初期段階とするならば、この時期のジーンズは何をおいてもアメリカのイメージ――そのものと言っても過言ではないほど――であったことだろう。本来の目的としてではない、包装材として入って来た木綿のズボンを再度本来の目的に沿って着用する日本人にとって、ジーンズとは強くて豊かで「カッコいい」アメリカを、文字通り肌に感じさせるものであったと想像できる。日本でのジーンズは、アメリカでの炭鉱労働者や西部の開拓民たちのイメージが源流にあるものではなく、日本にとってのアメリカ（軍兵）のそれである。そしてそれはたとえ彼らの労働着であったとしても、日本人にとっては全く同じではなかったのである。

3　若者の「ジーパン」――“ 労働着 ” ではなく

では、G.I たちによってファッションとして見せられたジーンズは、一体どんな人びとによって着用された／されなかったのであろうか。結論を先取りすると、1950 年代から 60 年代にかけては、映画や音楽という娯楽産業によってジーンズが普及したと言ってよい。そしてジーンズイメージと強い結びつきのあった映画や音楽の多くは、若者をターゲットにしたものであった。一方でそうした新しい娯楽やそれに興じる若い世代にたいして、先行世代は困惑し、批判したが、新たな潮流はより大きな魅力となって、他世代の趣味嗜好さえも変えてゆかんばかりとなってゆく。

映画の分野では、1955 年・56 年にジェームス・ディーン主演の「エデンの東」「理由なき反抗」「ジャイアンツ」が公開されたことが大きい。ディーンのジーンズ姿がアメリカの若い世代に

(11) ただし、北本によれば朝鮮戦争時代に大量に来日した G.I たちのジーンズは「明るい空気をもたら」すよりもむしろ、「一種の悲壮感をともなったものになったような気がする」と述懐されている。北本は詩人アレン・ギンズバーグを引いて、アメリカの自国勢力の拡大主義と物質偏重主義の危惧に共感している。北本、前掲書、17-18 頁。

(12) 北本、前掲書、17 頁。

(13) 千村典生『戦後ファッションストーリー』平凡社、1989 年、191 頁。

(14) 出石、前掲書、236 頁。千村の引用によれば、『質素革命』（ビジネス社、1971 年）の著者浜野安広は 1971 年当時「ブルー・ジーン・パンツ」を使っていた。千村、前掲書、263 頁。

もリーバイスの売り上げを急速に広めたように[15]、日本の若い世代にもジーンズの印象を鮮明に与えたのである。それは三井曰く、映画がカラー映画であり画面の大きなシネマスコープだったためである。また、宣伝用のポスターなどにディーンのジーンズ姿（白いTシャツ、赤いジャンパー、そしてブルー・ジーンズ）が多用されたことも理由の一つに挙げられる。そして何より、ディーン自身がその後（1955年9月30日）に自動車事故で夭逝したこと、死後すぐに遺作となる「理由なき反抗」が封切られたこと、それらがいっそう、ディーンとその役柄のジーンズ姿――反抗の態度とは裏腹にどこか傷つきやすい繊細さを有する少年像――を鮮やかなものとした。これら全ての要素によって、ディーン像は「反抗する主人公を美化し、半永遠的なものとして固定」されたと三井は指摘している[16]。しかしながら映画評は、ディーンとその演技には賞賛を与えるものの、映画が描きだすところの若者像には好意的ではない。「バカ気たアメリカの学生の遊びが紹介されている[17]」映画であり、描かれている10代の「心理の動きは案外退屈」で、それは「10代という題材の人間的深みに限界があるから[18]」だという評価だ。しかし、当時高校生であった三井はこの映画を見、同世代が描かれているという共感と「憧れであったアメリカの魅力」を感じてジーンズを購入したと述懐している[19]。

一方、同じころ日本でも映画スターによってジーンズは着用されている。1957年、石原裕次郎・三國連太郎が映画「海の野郎ども」「鷲と鷹」（ともに日活）で着用したことを、堀は「ジーンズ・ベスト・ドレッサー」の節でこう評している。日本人のジーンズ姿が評価されるのは珍しいので引用する。

> 「海の野郎ども」の石原裕次郎のオンボロ・ジーンズのカッコよさも忘れられないが、何といっても「鷲と鷹」に見た三國連太郎のブルー・ジーンズのはきこなし。これにはアチラなみの迫力があったことを記憶している[20]。

カラー映画である「鷲と鷹」での三國がジーンズのほか身につけていたのは、白いシャツと濃茶の革靴であった。三國は作品中「佐々木」という名の1926年生まれ、30歳前後の役柄である。佐々木は実は刑事なのだが、捜査上水夫として船に乗り込む。その時の服装が、堀曰く「アチラなみの迫力があった」ジーンズ姿であった。刑事として船を降りる際には白い麻のスーツに白い靴に着替えている。ここでは、ジーンズは年齢ではなく、水夫＝肉体労働者のコスチュームとして当てられていることに留意したい。ただし、その他の水夫役のズボンは青や紺色のも

(15) 三井徹『ジーンズ物語――「アメリカ発世界文化」の生成』講談社現代新書、1990年、121頁。
(16) 三井、前掲書、126頁。ディーン自身は24歳で17歳の役を演じていた。
(17)『朝日新聞』1956年4月3日。
(18)『読売新聞』1956年4月13日。
(19) 三井、前掲書、115頁。
(20) 堀、前掲書、245頁。ただし堀が第一にベスト・ドレッサーとしてあげたのはスティーブ・マックウィーン、チャールス・ブロンソン、ジャン・ポール・ベルモンドで「何でもない白のT・シャツにブルー・ジーンズを着てサマになる」3人だと評した。

のもあったが、三國の着用ものほどはっきりとジーンズとわかるもの（表側に出ているステッチなど）は確認できない。ちなみに石原は足の長さが強調される水色の細身のズボンに白いTシャツ姿であった。

また、1959年にはフランスの短編映画「ブルー・ジーンズ」が公開された。「題名は英語で、（略）青いもめんのズボンのこと。日本のハイティーンも好きなスタイル」だと紹介される。[21] しかし、この映画は「10代の少女が妊娠してしまい、相手の少年ともども困ってしまって堕胎医に相談する」という物語だ。三井は、ここでの「ジーンズは、おそらく主人公であるティーンネイジャーたちの危なっかしさと結びつけられたイメージのものであったと推測できる」と言い、「そういう不良的イメージが［ヨーロッパでは］世間一般にまだ持続していた」と指摘する。[22]

一方、音楽の分野でも新しいスタイルの流行が始まっていたが、1955年頃からのマンボ・ブームによって、マンボ・ズボンといわれる幅の細いズボン（トレアドル・ズボン）の人気が出た。[23] 胴から臀部、脚部の曲線を見せず、直線を裾まで保つ、いわゆる背広のズボンとは異なり、細身のズボンであることが特徴である。「鷲と鷹」で石原が着用していたのは、おそらくこれであろう。マンボ・ズボンとジーンズが混同されていたことを三井は記しているが、ジーンズだけでなくマンボ・ズボン（あるいはこれに似たスタイル）がズボンの太さ／細さという点でも問題となっていた。上下揃いではないズボンの購入を読者に促す記事では、「スソ幅9インチから9インチ半でこれ以上に細いものは、マンボスタイルじみて下品になる」と警告する。[24] なぜなら、「マンボズボンというのは、きもので言えばぞろりとしたした羽織のぬきえもんで白ぬりの若だんなといった種類のものらしい」ためだ。つまり「細くてぴったりしたズボンは女のためにデザインされた、女独特のもの」であり、男性が履くべきものではないからである。[25] 同じウール織物を用いながら、異なるシルエットにたいするこうした辛辣な眼差しは、男性の服装（背広）がいかにすでに固定された理想像を基本としているかが明白だ。アン・ホランダーはスーツが実際の身体の上に理想的なシルエットを提供するものだと論じたが、55年のマンボ・ズボンは男性の身体（足の長さ）を反映するというそれまでにない服装だったために、強い拒否反応が示されたのだ。重ねて、身体ラインが反映される衣服とは女性にこそ許されたものであるという“性別役割分担”を犯すものであったからである。

ただし、このズボン問題で言えば、5年後の1960年にはやや肯定的な意見もみられ、細身のズボンにたいする拒否反応は徐々に薄れていく。中村乃武夫は1960年に日本人の背広の仕立ての悪さを「背たけの割りにたけのベラボウに長い上着、ハカマかとまごうばかりの太いズボン」と評した。[26] 60年代なかばには細いズボンが徐々に“幅を利かせる”風潮が見られる。

---

(21)『読売新聞』1959年9月3日、夕刊。

(22) 三井、前掲書、139頁。『読売新聞』の記事では「カンヌの町と海岸をうろついて、女の子を“ひっかける”ことを仕事にしている17歳の2人の男の子の物語」と紹介。

(23) 千村典生によれば、バンドマンの衣装を模したものという。千村、前掲書、45頁。

(24) 青江聡介「男のおしゃれ　替ズボン」『朝日新聞』1955年10月23日。

(25) マダム・マサコ「実用とシック／女のはくズボン」『朝日新聞』1955年12月6日。

(26)「男のおしゃれ／遅まきながらためしたり」『読売新聞』1960年8月28日。

64 年には細いズボンさえ履いていれば「なんとか、かっこうよく見える」[27]ようになったといい、中村はそうした傾向を「ウェスタンかぶれの青年たちのカッコいい細身のスラックスをオヤジ達もまねてみる気になったのか」と分析した[28]。60 年代も終わりになると、身体ラインを反映する「細さ」はそれまでよりも肯定的に――ただし幾分の当惑さをもって――取り上げられる。記事では 68 年から「ヤング・パワー」に牽引される流行の様子をこうとらえる。

> おやじは息子に学び、母親は娘のまねをする。流行に遅れまいと思ったら、まず子どもたちを手本にすることだという。実際、おやじの背広のズボンは年々、細身になってきたし、母親のワンピース・スカートたけもずいぶん短くなってきた[29]。

服飾研究の青木英夫は同記事内で、「昔のおしゃれは上等の生地のものでていねいに仕立てたものを身につけるだけでよかった。現代では生地や仕立てよりも、いかにうまく、からだに合わせて着こなすかが大きなポイントになってきた」と重点の移動を示した[30]。このため、おしゃれをしたいのであれば、中高年者は身体を鍛えるべきであると奨められる。若者の服装を真似るだけではなく、若者が持つとされる「細さ」という属性までも「なわとびをするなり、美容体操を楽しむなどして」手に入れなくてはならないという価値転換がここにはある。55 年のマンボ・ズボンは「白ぬりの若だんな」として否定もできたが、68-69 年の「ボデー・ライン・ルック」は積極的に受け入れるべきと論される[31]。ただ、全てにおいて諸手をあげての賛成ではなく、男性の女性化（女性の男性化）には注意が向けられており、おしゃれの主導者の若者／大人の世代交代という価値転換以上に、男／女の性別越境は危険視されている。「銀座は気まぐれ」と題された写真特集[32]では、ジーンズ・スタイルのカップルの写真には「男女がわからぬヒッピー・スタイル」とキャプションがつけられている。

同じころ日大東大紛争が起こり、69 年に学園紛争として全国に広がった。このとき、荻村明典によれば、ジーンズは「ゲバ学生の制服」と言われたほどだというが[33]、セーターの色、形状（トックリセーター）、コート、そしてもちろんヘルメットの色には細かな言及はあるにもかかわらず、ジーンズについては新聞記事などには触れられていない。

むしろ、ジーンズ姿の学生は、危険視されるよりも「らしくない」と評価される記事があるほどで、『サンデー毎日増刊』の「大学のニューラジカルズ」では、ジーンズ姿の学生は、「カッ

---

(27)「おしゃれの楽しみ／男のズボン」『読売新聞』1964 年 9 月 23 日。
(28)「今週のオシャレ／ズボン」『読売新聞』1965 年 8 月 22 日。
(29)「“ ボデー・ライン ” でカッコよく」『朝日新聞』1969 年 1 月 24 日。
(30) 同上。
(31) 替えズボンに関する記事では「ぴったりしたものか、余裕のあるものか、好みをはっきりいって選ぶ」ことが大切だとのアドバイスを見ることができる。「男性の替えズボン／おしゃれ着として流行」『朝日新聞』1969 年 12 月 12 日。
(32)『毎日新聞』1970 年 8 月 26 日、夕刊。
(33) 荻村昭典「ジーンズ論争に見られる現代服装観」『衣生活』212 号、1977 年、37 頁。

コいい」と描かれる。

> 一昔前まで学生運動の活動家といえば、薄汚れてなりふり構わずといったスタイルが多かった。もちろんいまのラジカルズ［この記事では過激派学生］たちだって闘争をしてれば薄よごれてくるし、そんなパリッとしたかっこうで運動もできないわけだが、ともかくよごれなりにカッコいい。[34]

この記事担当者が考えるかつての学生運動家のカッコよさとは、「ハンチングによれよれのレーンコートで労働者の味方を気どることによって、左翼人の人間だけ通じ」るようなものであったが、ここでの学生たちは違う。新しい彼らのカッコよさは「さっそうと皮ジャンパーをはおったり、細身のＧパンをはいたり、髪の毛もビートルズみたいに」長く伸ばすスタイルで、「同世代の若者たち一般に通ずるようなカッコよさ」を持っている、とみなされていたことは注目に値する。ここでの「ラジカルズ」たちは、まさに大人たちと対立する若者であるが、彼らと彼ら自身の服装とを引き離して捉える視線があるのだ。ジーンズがすでに「若者たち一般」に浸透していたこともうかがわせるが、若者（学生）たちを異端視するだけではない視線のありようを感じさせる。

68 年からのヒッピー流行を受けて、69 年のジーンズの消費量が 700 万本、70 年のそれは 1500 万本、71 年には 2200 万本という爆発的な伸びを見せたジーンズは、たしかに人びとの目を慣れさせもした。[35] 71 年にはリーバイス社が日本に進出し、72 年の朝日新聞では「新宿でも、青山でも、若者の 2 人に 1 人、4 人に 3 人はジーパン」と報じ、「いつもならジーパンの季節は終わったはずだが、街からジーパン姿は消えない」[36] ままだったのだ。

また 1973 年から 1 年間、テレビには「ジーパン」とあだ名が付けられた刑事が活躍し、人びとに若者とジーンズの組み合わせを鮮烈に印象づけることになる。人気ドラマ「太陽にほえろ！」で松田優作演じる若手刑事「柴田純」は、「ジーンズにサンダル履き」姿で舞台である七曲署に登場したのである。それを見た上司は注意する。

> 「そんな格好じゃ仕事ができん、着替えてこい」
> 「いえ、これで結構です」
> 「なにっ」
> 「これしかないんです。警官の時は制服でしたから」[37]

このドラマで登場する刑事役はそれぞれ愛称で呼ばれているのだが、上記のやりとりのあと、

(34)『サンデー毎日増刊』1969 年 2 月 20 日号、79 頁。
(35) 吉岡忍「ジーンズ」『女の戦後史Ⅱ　昭和 30 年代』朝日新聞社、1985 年、112 頁。
(36)『朝日新聞』1972 年 9 月 13 日。
(37) 魔久平『太陽にほえろ！　ジーパン刑事登場③　日本テレビ編』読売新聞社、1975 年、42-3 頁。

柴田は1年間にわたって「ジーパン」と呼ばれ続けることになる。松田にジーンズの衣裳があてがわれたのは、彼の身長（185センチ）に見合う長さのズボンがなかったため、スタッフがアメ横で「インポートの外人サイズのデニムの上下」を見つけてきたと言われている。[38] 新人刑事柴田の役柄は、無鉄砲だが純粋、走るのが速いという若者で、翌年74年にホワイトデニム姿で「なんじゃぁこりゃぁ」というセリフを残し“殉職”し、強いインパクトを残して去っていった。いくらドラマの中とはいえ、柴田は警察官・刑事の役柄である。大人へ反抗する若者、新しい音楽に興じる若者というそれまでのジーンズが持つイメージを、無鉄砲でときに周囲の意見を聞かないが、職務に純粋な若者イメージにわずかながらずらすものであったことにも留意したい。大人世代が若者のファッションを真似るようになったというだけではなく、両者に積極的な歩み寄りを見出すことができるのではないだろうか。

この原因として、先にあげた爆発的な販売量とともに、すでに東京都ではジーンズ姿は珍しいものではなくなっていたことをあげることができる。1973年の「都民の風俗調べ」では、ジーンズ着用者は、男性の12％（51万人）、女性の7％（28万人）、男性は30歳以下、女性は40歳以下で、その8割が20歳代と伝えられる。[39] 男性では10人に1人がジーンズ着用者で、20代の男性40万人が含まれているというのである。女性はそれよりも数としては少ないが、注目すべきは着用年齢が40歳以下と男性よりも高い。同世代の男性たちがジーンズやそれに似た細身のズボン（とその魅力）に葛藤していたにもかかわらず、女性はなぜ40代までジーンズに親しむことができたのだろうか。次節では、女性とジーンズの関係を探ってみたい。

4　女子どもの「デニム」――家庭着として

以上、既製品としてのジーンズの歴史と着用のイメージについて考察してきた。ジーンズは若者、とりわけ男性にとって新しい衣服アイテムとして受け入れられた。若者を描いた映画で人気俳優に着用されることによって、ジーンズの魅力は倍増したと考えることができる。しかし、日本におけるジーンズを検証するにあたって、既製品としてのジーンズを見ることだけでよいだろうか。

既製服を購入しそのまま着用する、という行為は歴史のなかでは比較的新しい。人びとはデザインを決め、布地を購入し、自身で裁縫するかもしくは人に頼むなどして衣服の調達をしてきた。既製服はないわけではなかったが、それらは「吊るし」と呼ばれ、ある種の蔑称を与えられていた。従って、女性や子どものジーンズ受容を考える上で自家裁縫の視点の重要性は高いと言える。

さて、まず自家裁縫で基本となるものは布地である。ここでジーンズとそれにまつわる布地について、確認しておきたい。ジーンズはジーン（jean）から作られたものである。出石はジー

(38)『JEANS EXPRESS　特集松田優作』2005年12月9日、91頁。
(39)「都民の風俗調べ　流行の先端を行く人…3％」『朝日新聞』1973年6月19日。

ン生地について詳細に調べているが[40]、ジーンとデニムが歴史的にも非常に近い存在であることを指摘している。ジーン生地とよく似た綾織りの厚手の木綿地にはデニム生地があるが、このデニム生地には裏白のものと裏白でないものがある。この裏白でないものがジーン生地と混同されやすい。異なる二つは織り方に違いがあるのだが、ここでは広義の意味で裏白でないデニム、またそのデニムから作られたデニム・ズボンをジーンズと同類のものと捉え、日本におけるジーンズ受容の一側面にあてはめてみたい。

戦後の衣料不足のなかで、洋裁の人気が非常に高まった。新聞には洋裁関連の記事が毎週のように掲載される（主に家庭欄）。デニム生地を用いたアイテムはどんな風に紹介されているだろうか。女性向けのアイテムとしては、ブラウスや（ジャンパー・）スカート、エプロンなどで、「通勤や家事など」の「働き着[41]」、「スポーティーな服装用[42]」、「荒仕事にもたえる台所用エプロン[43]」、「ふだん着[44]」などの目的のものである。1953 年 6 月の「ブラウスとスカート」の紹介では、「厚地もめん（デニム）で作る」と見出しにあげられ、4 枚はぎのスカートの製図もあわせて掲載されている。

> 最近、若い方々に好評のデニム（本紺）のブラウスとスカート。西洋でも、このデニムが一般の婦人に歓迎され、特に薄手のものはドレスにも作られているほどです。日本でも、婦人の働き着やスポーティーな服装用としてデニムのラフ（粗野）な感じはうってつけといえましょう[45]。

また、1959 年の「デニムのふだん着」では、デザイナー桑沢洋子によるワンピースが掲載されているが、それには以下のような文句が並ぶ。

> 目から受けるスピード感、といった調子のスポーティーな装いが今の若い人に好まれるようです。個性と健康がむき出しにされ、それが近代的な美しさをみせてくれるからでしょう。そんな装いにともなって、ここ 1、2 年ぐんとのびてきたのがデニムです。（略）スポーツウェアから旅行用、ふだん着、リゾート用と何でも惜しげなく着られるという条件がそろっています[46]。

ここでわかることは、デニムという生地は、若者に人気のものであるという前提と、女性の日常着や旅行やスポーツなどの外出になら、スカートとして使用に不都合はない、ということ

---

(40) 出石尚三『完本ブルー・ジーンズ』新潮社、1999 年。特にジーンとデニムの用語については、36-37 頁。
(41)「ジャンパー・スカート　通勤や家事など働き着に　実用向婦人スカート」『読売新聞』1953 年 4 月 22 日。
(42)「厚地もめん（デニム）で作るブラウスとスカート」『読売新聞』1953 年 6 月 19 日。
(43)『読売新聞』1956 年 2 月 3 日。
(44)「デニムのふだん着　桑沢洋子さんのデザイン」『読売新聞』1959 年 8 月 9 日。
(45)『読売新聞』1953 年 6 月 19 日。
(46)『読売新聞』1959 年 8 月 6 日。

である。女性向けの洋裁記事にズボン（ジーンズ）が少ないことは念頭に置くべきであろう。女性は働き着、日常着であってもスカートをはくだろう、もしくはスカートをはくべきだという社会的な意識の表れである。

また、家事でもなく、スポーツなどでもない外出着には、別の布地が必要である。「毛織物で作れば外出着にもなります」という説明が示すとおりである。(47)

素材そのものに新繊維が用いられるようになると、風合いの違いが年齢の違いになる場合もある。1963 年になると化繊デニムという混紡生地が出てくるが、そこには木綿だけのデニムとのすみ分けも見られる。「木綿のデニムがハイティーンを代表するなら、木綿より少しつやがあって、しなやかな味をもつ化繊デニムは若奥さま向きのもの」とされるのだ。(48) 木綿のデニムは「個性と健康がむき出しにされ」た「粗野（ラフ）」なもの、若奥さまには相応しくない。女性は粗野であってはならず、「つやがあってしなやかな」印象のものでなければならないのである。

一方、「健康」が最上目的である子どもたちはどうであろうか。子どもたちの服は、洋裁のできる女性（母親）によって担われている。「水曜洋裁店　小さい子にデニムのズボンを」(49)、「手軽るに用を足せるオーバーオール　赤ちゃんや小さいお子さんに」(50)、「洋裁科　男女児両用のもめんの上着」「水曜洋裁店　デニムの長ズボン　思い切り遊ばせる」(51)、「火曜洋裁　坊やのいたずら着　2、3 歳の男児用　デニムのオーバーオール」(52) などが紹介されている。「思い切り遊ばせる」ための「いたずら着」である。

子ども向けのデニムアイテムは、洋裁記事だけではなく、流行記事も同様に読者へ奨めている。1957 年には子ども服の流行について「最近の子ども服は、一般の婦人服にならって、なかなか手がけたものが多くなりました」とデザイン性の向上を指摘し、素材には「ウールかデニム」、それらの「色は渋いのが流行です」と伝えている。(53) 1961 年には森英恵が「アメリカの子ども服」と題する手記を寄せている。(54) そこでは「日本でもだいぶ一般的になってきたジーンズといわれるもめんのズボンは、アメリカが生んだ子どものための傑作だ」と紹介する。アメリカではデニムの色のバリエーションも豊富で「小さな子どものスポーツウェア」として扱わ

---

(47)『読売新聞』1953 年 4 月 22 日。一方、成人男性用の家庭用ズボンの作り方記事では、今でいうコットンパンツ（パジャマの下衣のようなもの）の説明に、「作業ズボンにみえる色や柄は、家庭的にくつろぐ雰囲気をなくしてしまいますから、ウーリーの木綿地」を使うようにと注意されている。『朝日新聞』1958 年 7 月 12 日。成人男性は家庭着でもウーリー（woolly）コットン、毛綿交ぜ織り（もしくは毛織物風の風合いをした木綿地）のものを使うことが大切だというのである。成人男性のものと外出着には毛織物が適しているという通念を確認したい。

(48)「おしゃれのヒント　若奥さま向きに　化繊デニムで　家庭着兼用の町着」『読売新聞』1963 年 7 月 31 日。

(49)『朝日新聞』1952 年 4 月 4 日。

(50)『読売新聞』1953 年 3 月 5 日。布地に「デニム、コール天、スフ織物など丈夫なもの」を使うよう指南されている。

(51)『朝日新聞』1966 年 4 月 13 日。

(52)『読売新聞』1966 年 8 月 23 日。

(53)「秋から冬への子ども服」『読売新聞』1957 年 9 月 15 日。

(54) 森英恵「アメリカの子ども服」『読売新聞』1961 年 10 月 19 日。

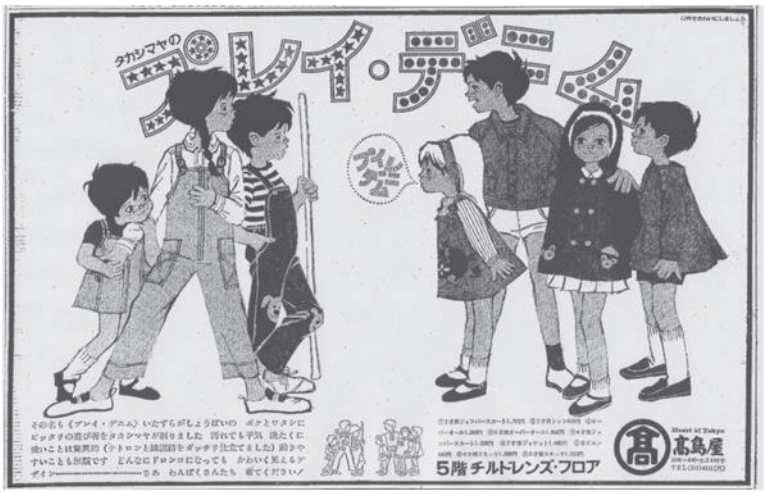

図1　高島屋広告

『読売新聞』1964年4月4日

れていたという。森は、「おとなの服は、相当の水準に達してしまった日本ですが、子ども服については、特殊な階級や一部の人を除いては未開」であるから、「婦人服に集中し過ぎている業者の方たち」の関心を子ども服に向けてほしいと締めくくる。

森の提案通り、デニム素材の子ども服はそれ以降、初夏のデパートをにぎわせることになる。1963年には西武百貨店、1964年は高島屋、1965年には高島屋、東武百貨店、銀座松屋が子ども服にデニム素材を用い、宣伝文句としている。1964年の高島屋広告「プレイ・デニム」では、子どもとデニムの性の良さを以下のように謳っている。

> その名も〈プレイ・デニム〉いたずらがしょうばいのボクとワタシにピッタリの遊び着をタカシマヤが創りました。汚れても平気　洗たくに強いことは驚異的（テトロンと綿混紡をガッチリ仕立てました）動きやすいことも無類です　どんなにドロンコになっても　かわいく見えるデザイン（略）さあ　わんぱくさんたち　着てください！[55]

この広告が伝えるものは、元気に動き回るのが子ども、時にはいたずらでさえ「しょうばい」である存在には、テトロン繊維と混紡のデニムがうってつけであるということだ。しかも汚してもなお「かわいく見える」、夢のような子ども服を「着てください！」と訴える。翌65年の広告も子どもたちのイラストで、女の子はジャンパースカート、男の子は半ズボンにジャンパー、オーバーオールを着用している。縄跳びをする女の子は「デニム着たら50回もできたのョ」とニッコリし、ジャンパー姿の男の子は「ヨーシ……デニムであばれるゾ！」と犬を見つめている[56]。東武百貨店は繊維メーカー「東レ」とタイアップして「東レ／ぐんぐんルック／

(55)『読売新聞』1964年4月4日。
(56)『読売新聞』1965年4月3日。

子供服デニム大会」と銘打ったイベントである。こちらも新繊維との混紡を売りとして、かつ、「どれもセンタクにぐんと強く、ちぢみません」とアピールすることも忘れない。子どもの写真には「できたぞ！〈よごしても叱られない服〉」のコピーが踊る。[57] 松屋の広告の子ども像はさらに元気である。

> レスリング遊びをしてもなかなか破れません。デニムだからです。どろんこになっても、すぐ洗えます。ナイロン・デニムだからです。[58]

洗濯に強く、激しい動きにもなかなか破れず、そして汚れが気にならぬデニムの服は、まさに子どものための「傑作」と受け止められたとしてもおかしくない。こうしてデニムは、子どもイメージをポジティブに受け止めながら流通を拡大していったのである。

しかしそれと同時に、成長してデニムズボンではないものを求める子どもには警戒の眼差しも向けられていた。中学高校生、（ロー）ティーンと呼ばれる子どもたち（主に少年）とジーンズを結びつけ「不良」とみなす視線である。

1961 年、中学生らによるジーンズ窃盗の事件が起きる。「映画やテレビで見た人気スターのジーパン・スタイルにあこがれ、米軍キャンプからジーパンばかり 38 本を盗み、得意になってはいたり、友だちと物々交換していた中学生 13 人」が補導された。しかし、彼らは「ジーパン盗みのほかは問題のない少年たちで、ローティーンの世界はわからない」と補導にあたった少年係は訝しがる。[59] この事件は、ジーンズの窃盗という実際の犯罪行為がなされているが、「ジーパンの他は問題ない少年たち」のはずなのに、ジーンズのためにこのような問題を起こすとは「わからない」と大人たちは不安に思っている。

窃盗とは別に、単にジーンズをはいていることが「不良」と結びつけられて語られることもある。例えば、1963 年の修学旅行での問題は、地元の学生とケンカなどで問題を起こす、見学地や旅館等で騒ぎ苦情を受けるなどを挙げているが、記事では事前指導とともに家庭の協力を訴えている。服装の乱れの監視である。「修学旅行は制服という原則が守られているはずなのに、ジーパン・スタイルやはでな色のシャツを着込んだ生徒が町なかを歩いています」と母親に注意を呼びかける。制服ではないジーンズなどの「非行の原因になりかねないものを持ち出していないか気をくばってほしい」というわけである。[60] ジーンズを修学旅行先ではいたからといってすぐに「非行」行為をおこなうわけではないが、“服装の乱れは心の乱れ”であるから、その芽は未然に摘まなくてはならない。なぜなら、非行少年とジーンズは強く結びついているものと考えられているためだ。交通違反の少年たちの「訓練」の様子をルポルタージュで伝える記事は、そのタイトルに「ジーパンに正座療法」と掲げられている。これは「交通違反

(57)『読売新聞』1965 年 4 月 12 日。
(58)『読売新聞』1965 年 8 月 27 日。
(59)『読売新聞』都内版、1961 年 11 月 25 日、夕刊。
(60)「春の修学旅行を終えて」『読売新聞』1963 年 6 月 26 日。

や事故を何回も」くりかえし、「スピード魔にとりつかれた」少年 35 人を対象にした少年交通訓練所の報告である。しかし、実際に本文を読んでみると、この少年たちの服装は「34 人はラッパズボン、残りの 1 人はジーパン姿。赤いトックリのセーター、黒皮の背広…。盛り場のあちこちで目につく、例のスタイル」と説明されており、35 人中たった 1 人のジーンズ姿がタイトルとして代表されてしまう事態となっている[61]。もちろん、「ラッパズボンに正座療法」ではおさまりが悪かっただけかもしれない。しかし「赤トックリセーターに」でも「革ジャケットに」でもなく、ジーンズが選ばれていることはそれだけ読者に訴えかける力をジーンズが持っていると記者が考えたからではないだろうか。大人たちはジーンズ姿の非行少年をイメージしやすかったと言えるだろう。

ジーンズをある種の「非行」と結びつけることは何も子どもだけの特権ではなかった。

女性用のジーンズは 1956 年にマダム・マサコによって「レディメードの傑作」の「デニムのパンツ」として紹介されている。「この戦後、アメリカからはやってきたズボンでどなたもご存じのもの」だと彼女は言い、「実際にはいてみると、こんなに気を使わない便利なものは、ちょっと少ないと思います」と奨めており、「うちで思う存分はたらいたり、時には、とびまわったりするのも、たいへん愉快な生活」ではないかと提案さえしているほどであった。しかし、洋裁の記事においてはスカートの方が優勢であったのは見てきたとおりである[62]。北本は 1974 年にアンケート調査を行っているが、女性たちの 91% が「ジーンズが好き」と答えている。その理由は「着心地がいい」59%、「フィーリングが合うから」23%、「安価だから」17%、「流行しているから」6%、その他 4%の結果が出ている[63]。池田孝江は同時期、短大生 31 名にジーンズについての印象を聞いているが、そのうちの 21 名が「ジーンズをはくと自由な気持ちになる」と答えていた[64]。

ただし、女性のジーンズ着用は、男性のそれと全く同じにみなされていたわけではない。女性のジーンズは、着用者本人の「便利」「自由」だという実感よりも、ただその姿と振る舞いが、

---

(61)「交通違反 “ 少年の家 ” ／長瀞の「訓練所」ルポ」『読売新聞』1965 年 1 月 28 日。

(62) ただし、戦後は女性が本格的にズボンをはき始めた時期であった。日本の女性たちは活動的な服装を着用することとは縁遠く、村上信彦はそれを社会体制の結果であるとして性差別性を訴えた。村上信彦『新版　服装の歴史 3　ズボンとスカート』理論社、1974 年、213-235 頁、および『新版　服装の歴史 4　戦後服装史』理論社、1975 年、9-80 頁を参照。ズボンをはく、という行為は今では当たり前のことであるが、1950 年代にはまだ何かしら「特別なこと」を思わせ、例えば『読売新聞』1957 年 5 月 18 日では、「スラックス姿の魅力／服は目的によって着わける」という指南がなされたり、伊藤紫朗「魅力のポイント　スラックスと女性」『読売新聞』1966 年 8 月 23 日では、欧米の女性たちとは異なり、「スラックスは日本の女性に合わない、などと頭からきめずに、もっと利用してはどうだろうか」と奨めている。ただし、村上は流行のものとしての女性のズボン着用に関しては、否定的であった。『朝日新聞』1957 年 11 月 14 日。

(63) 北本、前掲書、171 頁。

(64) 池田孝江『服装の生活史』大月書店、1975 年、183 頁。その他、「活動的な美がある」「ロングスカートをはいているときの女性らしさ」につかれたとき、ジーパンは安らぎを与えてくれる」「女性の地位の向上した現在、男性と同じスタイルをしたいというあらわれである」「ジーパンの活発さのなかにも女性らしさが見出せる」など。反対の弁には「足の短い日本人にはにあわない」。池田自身は「足やももにぴったりのジーンズは、外見上は活動的だが、日本式の住居ではすわるときつくて、みた目ほど楽ではない」という感想。池田、前掲書、182 頁。

女性として度を越した行為とみなされていたのである。

「ジーンズとわたし」の記事のなかで、タレントの松岡きっこはこう回想する。[65] ジーパンが大好きになった中学生のころ［松岡は 1947 年生まれ、推定 1960-63 年ごろ］に祖母にこう言ってよくしかられたという。「そんなきたない作業着みたいなもの、着るのやめて。ご近所にみっともないから」。あげく祖母は松岡の留守にジーパンを納戸のボロ入れに捨ててしまったこともあった。祖母は優しかったが、ジーンズやマニキュアのようなものにはうるさかったとのこと。また、彼女は記事掲載当時もジーンズを愛用していたらしく、「テレビのリハーサルのときなんか、どこにでもすわれるのでよく着ていく」と、汚れてもよい服と認識している。

ジーンズ姿の女性たちの意識的な「非行」も警戒されている。学園紛争後のウーマン・リブ運動では、男性の服装には注釈がつかないこととは対照に、何を着ているのかがしっかりと書きとめられている。「ジーパン・トンボメガネ。クロヘル、ブーツ」姿のジグザグデモに参加する女性たちが描かれている。[66] リブ合宿の様子では、服装だけでなくその振る舞いまでが記される。「ノーブラに T シャツとジーパン、もしくはホットパンツが圧倒的。（略）むろん、キチンとすわっている“おんな”なんてひとりもいない。あぐら、立てひざ、ひでェのは寝っころがって」テーブルに足をのせていると非難する。[67] 女性たちは自分たちが「見られている」ことも含めて、性差別の問題ととらえており、男性とは異なる社会規範が存在していること、それは服装も同じように非対称性をもっていることを世に問うた。ウーマン・リブの「ドテカボ一座」の人形劇では、ジーンズで出勤する女性にたいして男性上司が批判するのを、主人公である「あんぐり」が同意している様子が自虐的に演じられたのである。（ドテカボ一座「人形劇　あんぐり」1975 年 3 月）。ただし、劇中ジーンズで出勤する女性は直接上司にとがめられてはいない。すでにジーンズでの出勤は都心で当たり前になりつつあり、しかもそれは好意をもって受け止められる側面もあった。満員電車に人びとを押し込む「荷さばき」は、「ジーンズ文化」によって大幅に改善されたというのだ。OL の出勤スタイルとしてのハイヒール・ブラウス・パーマヘアは新しいスタイルに変わる。「ジーパンにセーター、またはジーンズの上着では、どんなに人込みにもまれても悲鳴をあげる者はいなくなった」ため、「いらい、中央線新宿駅ホームの乗客係からベテランは姿を消した」のである。[68] 女性のジーンズ姿は、女性たちに便利さと自由の感覚とをもたらし、満員電車の光景を変えた。しかしながら、女性のジーンズ姿に穏やかならぬものを感じ、苦々しく受け止める「あんぐり」の上司はまだ、日本中に存在していた。

---

(65)『朝日新聞』1971 年 9 月 5 日。この記事では、松岡や後述の長沢のほか、鳥飼玖美子、小川知子、仲谷昇、岸田今日子が各々ジーンズへの思いを語っている。

(66)「ミニドキュメント　解放への“叫び”　東京 ’70・10・21 デー」『朝日新聞』1970 年 10 月 22 日。

(67)「期せずして“性告白集会”となったリブ合宿」『週刊文春』1971 年 9 月 6 日号、133 頁。

(68)『朝日新聞』1976 年 10 月 14 日。

5 「ジーパン」は誰のものなのか――揺さぶられるイメージ

1977年5月、大阪大学文学部でアメリカ人フィリップ・ペーダ講師がジーンズを着用していた女子学生を教室から追い出した。「阪大ジーパン論争」である。この事件は、もともと女子学生にズボンの着用を禁止していた講師が、たまたまその日にジーンズをはいていた女子学生を追い出したために「阪大ジーパン論争」と名がついてしまったが、実際には「阪大ズボン論争」と言うべき、性差別についての論争であった。[69] 学生たちは「なぜ女性のジーンズ（ズボン）はダメなのか」と抗議し、講師と2週に渡り話し合いをしたのだが平行線をたどり、講師が辞任することで幕が引かれてしまった。このとき、講師からは「大学に来る女性はレディらしくあるべきだ」という講師なりの性別役割固定の重要性と、それに付随した階級的な通念、「ジーンズはアメリカの真似であるから、それは日本人として精神的自殺だ」という伝統・文化の強調、そして「教室のリーダーは学生ではなく教師だ」という上下関係の再確認がなされたのであった。そして「これが自分の教育哲学だ」とまとめた。これをメディアが報道すると、新聞には多くの反響が寄せられ、投書ブームを引き起こした。講師の主張は上記3点であったが、3点とも保守的な理想を語る言説であり、3点の主張が互いに結びつき、互いを強化するようなものであったために、読者からの投稿は講師支持が優勢で、性差別問題は一気に後景化してしまった。投書の意見も教師の主張の一部のみを大きく評価するもの、全体をまとめて評価するものなど、問題の軸がずれたものが多かった。どちらにしても講師の持つ性差別性よりも、日本人として考えねばならぬ重要性が講師の指摘にはあると考えられていたようだった。なぜなら、TPOをわきまえない今どきの聞き分けの悪い若者を、日本人ではなくアメリカ人のこの講師が叱ってくれた。問題の本質はジーパンではなく、教育あるいは文化や伝統なのだ、と。

例えばジーンズとの強い結びつきで学生たちを批判するものにはこのような意見があった。

> 恩師、先輩に物事を習うには、それ相応の態度というものがいり、その整然さが習う側の礼儀である。ジーパン姿を平気で恩師の前にさらす無知は、いわば、精神的に未熟な反抗期といえよう。（略）大人たちはすぐ逃げてしまわず、わかりやすく教え諭してやるべきだ。[70]

> 物を学ぶために、大学へ入ったのであったら、精神的なものも含めて学んでほしい。単に覚えるためならば、部屋でジーパンでごろ寝のまま、テープを聞いていればすむではない

(69) 講師のズボン嫌いは有名であった。彼は前年のインタビュー記事でもこのように答えている。「女性のズボン大きらいです。［神戸］女学院のボクのゼミナールにはズボンの学生は一人もいません。校庭でピンクのズボンをはいた学生をみると、あなた田んぼへ稲刈りに？って聞いてやります」。「日本と私　お見合いってキザだネ　フィリップ・カール・ペーダ氏」『朝日新聞』1976年5月24日。また、講師が大阪大学の学生と約束した三つの禁止事項は、遅刻はしないこと、タバコは吸わないこと、そして女子のみ授業にズボンをはいてこないこと、であった。

(70) 熊倉鐸「若者正す当然の態度／礼儀教えるのは大人の責任」『読売新聞』1977年5月31日。

か。[71]

ジーンズが、精神的に何か欠落した、あるいは未発達な若者（大学生）そのものを表象するものになっている。

この事件がもし、メディアによって「阪大ズボン論争」と名づけられていたならば、女子学生にのみズボン着用を禁止する講師の主張は、時代錯誤なものと考えられたであろう。そして講師の「レディらしくあれ」という女性尊重／女性差別の表裏一体の文言は、これほどまでに効力を持たず、一笑に付されたかもしれない。

しかし、「ジーパン論争」と名づけられてしまったことで、問題はより複雑で繊細なものになってしまった。アメリカ人から「日本人はこのままでいいのか、アメリカの真似をするだけでいいのか」「アメリカの真似をすることによって、日本らしさは失われたのではないか」と問われることは、単なるジーンズがジーンズ以上のイメージを背負い込んだようにみなされたのであった。[72]

繰り返すが、この事件はジーンズの売り上げが爆発的に多くなったその後に起こったものである。前掲の三井が指摘するように、「すでにジーンズは若い世代に浸透していて、いさかか時代錯誤の感はすでにあった」にもかかわらず、講師の意見は、学生たちの意見よりも多分の賛同を得た。[73] 三井はこれを「その時点では、ジーンズにはまだ、若い世代の新しい生き方、既成社会の価値観とは違った新しい価値観を象徴するもののひとつであるといった主張がこめられていた、あるいはまだその名残があった、といっていいだろう」とみる。[74]

しかし同年に、TPO をわきまえぬ、わがままな若者・女性・少年たち／大人という対立を善意で揺さぶる出来事があった。それがくしくもジーパン論争のあった阪大の教員によって行われたことは、ジーンズイメージの勝利であり、社会的通念の後退と位置づけることができる。

阪大医学部の中川米造助教授は、1977 年の 4 月から、授業をジーンズ姿で行い始めた。[75]「「新しい教育法の成否をかけた自己改革」という信念の産物」がジーンズ姿での授業登壇につながったからである。中川は、「「学習する主体はあくまで学生で、教師は学生が学ぶための“援助者”にすぎない」という理念に基づいた授業」を成功させるため、「学生の間に入るためには、ネクタイ、背広姿では堅苦しい」と考え、ジーンズを着用したのだが、彼の妻からは「大学教師

(71) 丸岡礼子「ペーダー講師を見習っては」『毎日新聞』1977 年 5 月 31 日。

(72) このほか、講師の発言を意図的に隠蔽したメディアの問題もあげられるが、詳細は拙稿「阪大ジーパン論争再考　1977 → 2007――女性と服装をめぐる議論の矮小化と隠蔽」『待兼山論叢』日本学篇、第 41 号を参照のこと。

(73) 事件報道のあった 2 日後の 5 月 27 日までに毎日新聞に届いた投書・電話は、8:2 の割合でペーダ講師支持であった。『毎日新聞』大阪版、1977 年 5 月 27 日。

(74) 三井、前掲書、3-4 頁。

(75) 中川の担当したこの授業は「医学概論」。1954 年から担当しており、「医学概論研究の第一人者」であった。『読売新聞』大阪版、1977 年 5 月 30 日。

のイメージに合わない」と猛反対にあったのだという。[76]

中川自身は当時 51 歳、ジーパン論争のペーダ講師よりも 5 歳年下であった。中川は自身について、髪には白髪があり、歯は義歯であるとしながらも、「今年の 4 月から勇を鼓して、ジーンズ・スタイルで教室に出ることにした」のだ、という。そして、職業と服装について、このように語る。

> 大学教師がジーンズを着たら、注目されるというのも、考えてみればおかしな話である。小・中学校の教師たちはトレパン・スタイルで授業をやっている。大学教師だけが背広でなければならない理由があるとすれば、それは最高学府の教師としての威信を示すためのものでもあろうか。（略）日本の大学でこそ教師のジーンズは、まだ稀にしても、アメリカやヨーロッパでは、それほど稀ではなくなっている。先日も欧米の医療事情を視察して帰った友人によると、医師たちもジーンズ党が増えているという。[77]

中川にとって、背広をやめ、ジーンズを着用するのはより学生に近づくためである。教師は学生の「援助者」だとする中川と、教室のリーダーは教師だというペーダの違いがジーンズに表れたのは興味深い。実際問題として、中川の「学生の間をぐるぐる回り、質問と意見を求める。教壇に立つ時間はほとんどない」という授業スタイルは、物理的に背広（スーツ）でできないものではない。[78] しかし、彼の採用したのはジーンズという若者イメージであり、ジーンズならば学生も受け入れやすいであろうと推測した（実際に学生がみなそう感じたかどうかは疑問だが）その心理的な戦法なのである。

一方では、中川のような「中年」以上の潜在的着用者を、メーカーはターゲットにしていたことも忘れてはならない。ジーンズはそろそろ若者世代には飽和感が漂い始めていたのだ。1970 年に「男のおしゃれ」という記事が掲載され、年配男性に問うている。「日曜日の庭いじり、大工仕事、あるいはピクニックに行く」ときなどの服装に何を選んでいるだろうか。「ズボンは通勤にははけなくなったくたびれたものを着用におよぶひとがほとんどだ。これではおしゃれにならない」と記事は続けて、「そこで、若い人たちに人気のあるジーン・パンツを中年層もはいてみてはどうだろう。丈夫でシワも気にならず、しかも野性的な印象が年齢より若くみせようというもの」と、ジーンズの効用を述べる。ただしウエストサイズは「泣きどころ」で、69-85 センチがデパートでの主流であると言い、「おなかの出てきた男性には残念だが、裏返すとこのくらいのウエストを保たないとおしゃれはできませんよということ」とやや厳しい意見を付け加えている。[79] しかし、7 年後のこの年には、メーカー側が新たな購買層を開拓し

---

(76)「“ 渦中の阪大 ” ジーパン講義　“ きまってる ” 中川助教授　“ 仲間になるには ”　4 月からヘンシン」『読売新聞』大阪版、1977 年 5 月 30 日、夕刊。

(77) 中川米造「ジーパン教授の教育論　服装革命と教育革命の間」『エコノミスト』1977 年 7 月号、49 頁。

(78)『読売新聞』大阪版、1977 年 5 月 30 日。

(79)「ジーン・パンツ」『読売新聞』1970 年 10 月 31 日。

ようとジーンズそのものを変えようしていた。なぜなら、ジーンズの売れ行きが横ばいになったためだという。75 年ごろから主婦向きのものを、77 年には 40 代前後の中年男性向きを販売した。その見出しには「ファッションにも中年化の波　新市場開拓ねらう／腰回りをゆるめにする」と掲げ、記事のタイトルは「おとうちゃんジーンズ」であったのだ。(80)

6　おわりに

ジーパン論争のあとにも、変らず（というよりも、むしろいっそう）ジーンズの着用が拡大していったことは、現在のわれわれのよく知るところである。もし、現在、大阪大学でジーンズ着用者は授業の入室不許可となった場合、どれだけの学生と教員が締め出されるであろうか。一時的に“ジーンズの若者”への叱責に酔った日本社会は、その後、また平然とジーンズを着用し続けたのである。

アメリカにおけるジーンズは、“定説”の通り金鉱労働者の作業着として出発したためにそのイメージが色濃く付与され、労働（者階級）着と呼ぶにふさわしかったかもしれないが、日本でのそれは全く異なる出発点を持つものであった。敗戦後に救援物資として日本に届いたジーンズは、朝鮮戦争時の G.I たちの姿を形作ったものとして、アメリカ（軍、あるいは兵士）の「カッコいい」イメージを振りまいた。50-60 年代には、映画や新しい音楽を楽しむ若者たちにとってジーンズは憧れの存在であったが、大人たちからは身体にフィットする新しいシルエットの服として懐疑的に捉えられる存在であった。なぜなら、身体のラインを見せる服は女性だけにのみ許されるものであり、男性にとってそれは身体表象の女性化に他ならなかったからである。しかしながら、大人世代は徐々に細いラインを肯定的に「若者らしさ」とも捉え始め、緩慢な速度ではあるが、60 年代末には好意的な評価に転じる傾向も出てきたのである。

一方、女性や子どもたちは自家裁縫によって、既製品としてのジーンズよりも先に、デニム地を家庭着として誂えなじんでいった。汚れてもよい服として子どもイメージはデニム地に付与され、消費を拡大し、女性たちにはそうした子どものデニムとは異なるデザインや風合いを自身のイメージと重ね合わせられたのである。ただし成長する子どもたちがデニムではなく大人用のジーンズへ目が向くと、それは不良のイメージを帯びるものと考えられ、監視や規制の対象となってしまう。

60 年代末から 70 年代初めにかけてジーンズは爆発的な流行を見せ、都市部ではすでに見慣れたスタイルになったにも関わらず、ジーンズは礼儀を失するもの、安心ならないものとする心理は人びとのうちに保たれていたのである。それが噴出したのが 77 年に起こった「阪大ジーパン論争」であった。この論争自体は講師の「女性はズボンをはいてはならない」という性差別性からなるものであったが、女子学生が着用していたものがジーンズであったばかりに「ジーパンの是非」にすり替わってしまった。また、講師が新聞で述べた「アメリカの模倣は日本人

(80)『朝日新聞』1977 年 2 月 23 日。

の精神的自殺である」という主張によって、教育や文化・伝統までも含む議論に発展した。

しかしながら同年、同じ阪大で、教員があえてジーンズ姿になることで学生との距離を縮め、それによって教育の質を向上させようという取り組みがなされ、メディアはそのジーンズ姿を彼の挑戦を表現するものとして評したのである。リーバイス会長が高らかに誇ったように、ジーンズはいよいよ若者世代の専有状態から、あらゆる世代、性別にかかわりなく、どのような人びとにもふさわしい服へと価値を転換させることに成功したのではないだろうか。来る 80 年代にジーンズは「高級感」という新たな価値の取得へまい進するのだが、これは別稿で論じることとする。

アメリカかぶれ、男性の女性化・女性の男性化、青少年の不良化という負のイメージをどこかに内包しながら、ジーンズはそれ自身で世代やジェンダーによる「らしさ」――ジーンズにふさわしい人のイメージ――を、徐々にずらし、揺るがし、崩していった。逆に言えば、ジーンズをはく人びとがそれまで有していると考えられてきたイメージを、ジーンズそのものが変えてしまったとも、みなすことができるだろう。